

# 版画（創形）実技研修報告

都立蒲田高等学校教諭 村 上

## 1. はじめに

今年の創形美術学校での夏の実技研修は、版画とテンペラ画の二本立てでした。版画は大沼正昭先生、テンペラ画は工藤礼二先生のご指導の下、どちらかを選択し、専門的な技法を教わりました。

美工研の実技研修に参加し始めて、今年で4回目です。創形美術学校さんでの版画実習は毎年とても楽しみにしている研修です。受講を始めた1年目はシルクスクリーンを選択し、以降3年間は銅版画を選択して受講させて戴きました。シルクスクリーンのご専門の小山先生がご勇退された年（2011年度）は銅版画の研修のみでしたが、今年は版画とテンペラ画の2種類の研修を用意して戴き、昨年以上に参加者が増えました。鑑賞会の時間には多くの作品が集まり、とても充実した研修会となりました。忙しい高等学校の校務から離れて池袋で実技研修を受けるのは、気持ちの上でもリフレッシュできる大切な時間です。また、美術の先生たちと情報交換をしたり、新たな美術の可能性を探る場でもあります。今回はすいどーばた美術学院の見学会などもあり、徒歩で見学に伺いました。受験生たちの逼迫した緊張感のある制作の様子を見て受験の頃を思い出すこともできました。

版画をご担当してくださっている大沼先生の創形美術学校での版画研修は来年が最後となります。今年も先生のアイデアがたくさん詰まった教材を紹介して頂きました。最後の受講となる来年度は非常に寂しい気持ちで受講することになってしまいますが、今まで教わった事を活かして高等学校の美術の授業で版画を取り扱っていきたいと思います。

## 2. 研修日程

日時 平成24年8月20日（月）～22日（水）  
9：00～16：00

場所 創形美術学校（池袋）

講師 大沼 正昭氏（創形美術研究科主任・日本版画協会会員）

内容①エッチング・アクアチントの技法を中心とした2版による多色刷り作品の制作  
②白と黒の宇宙を味わうメゾチントによる作品の制作

版画講座参加者 8名

## 3. 版画研修について

創形での版画研修は、毎回地下の版画工房で銅版画の版の制作から摺りまで全ての工程を実習しています。大型のプレス機が数台、メゾチント用の版を作る機械があり石版画も行っているそうです。研修ではエッチングとアクアチントの技法を使って銅版画を作るという内容を選択しました。

エッチングは、銅版にグラウンドと呼ばれる防食材を薄く塗布し、その上からニードルで引っ掻いていきます。引っ掻く事でグラウンドが剥れ、銅が顕わになり、腐蝕液に浸けることで引っ掻いた線が腐蝕されていきます。ハッチングの効果、細く滑らかな線、強弱・抑揚のある線などを表現するのにエッチングは適しています。腐蝕時間、腐蝕液の濃度の違いで、腐蝕の度合いが左右されます。

アクアチントは、名前にアクアとついているように水彩画で着色したような表現ができます。松脂の粉末を銅版にふりかけ、アルコールランプで下方から加熱し松脂を溶かします。腐蝕させれば、松脂がふりかかったところが水彩画のような表現効果を得られます。

制作の全体的な流れは、次のような順序でおこないました。

- ①下絵の準備（事前に用意する）
- ②トレースして銅版に転写する
- ③銅版をニードルで引っ掻いて線を描く

- ④銅版を腐蝕液に浸けて腐蝕する
- ⑤グラウンドを剥がし、アクアチントをしな  
い部分に黒ニスを塗る
- ⑥銅版に松脂をふりかけて加熱する
- ⑦銅版を腐蝕液に浸けて腐蝕する
- ⑧黒ニス、松脂を剥がす
- ⑨腐蝕した線、面にインクを詰める
- ⑩刷る

描画の線やアクアチントの濃さに強弱をつけたい場合は、黒ニスを塗り、数回に分けて腐蝕を行います。

#### 4. 版画が刷り上るまで

1日目は全体説明、版画制作の工程を教わりました。大沼先生作の「銅版画制作ノート」が毎年改良され私にとって版画のバイブルです。直接法、間接法、版の種類（凸版、凹版、平版、孔版）等とても解りやすい解説です。初日の作業は用意した下書きをトレーシングペーパーに写した後、銅版画、カーボン紙、裏表が逆のトレーシングペーパーの順に置き、下絵を転写します。あとはひたすらニードルで描画です。カリカリカリ…ニードルで版を引っ掻く音が心地良かったです。しかし、最終日に刷りが間に合わなかったらどうしようと思いきり焦りながらの描画でした。メゾチントを選んだ先生は、スクレーパーでしっかり削っていきました。2日目もニードルで描画です。エッチング・アクアチントは2版多色刷りなので2枚仕上げるには時間が必要です。下絵は同じなので、線がずれないように慎重になります。線が全て描けたら腐蝕へ。しっかり線を出したい所は長時間の腐蝕、薄い線の所は短時間かつニス止めをして腐食します。時間差で線の濃淡が出ます。エッチングが終わったら、アクアチントへ。グラウンドをリグロイン溶液で落とし、アクアチントをかけない部分に黒ニスを塗ります。松脂をすり鉢で粉碎し、ガーゼに包んで銅版の上で振るとパラパラと松脂の粉が出て

きます。加熱すると透明になり固まります。アクアチントは3段階程度の濃度差があると効果的ですが、松脂の撒きなおしはその度にニスを剥がして撒きなおすため非常に手間がかかります。しかし、この作業があるからこそ、銅版画の緻密で繊細な表現が可能になります。3日目はアクアチントを少し施してから、刷りの準備にかかりました。インクを詰めて寒冷紗で拭き取り表面のインクを整える。最終的に、大沼先生が手の腹でインクを拭きとる所をみるとプロの技は凄いといつも感心します。版の上に湿らせた紙が置かれプレス機にかけられる…プレス機の周りには人だかりができ、作品が見える時には「おお～」という歓声が聞こえてきます。

メゾチントは実際に刷って見ないと、削り具合や追加で削る箇所判断がつきにくいので何度もかいては刷りの繰り返しのようなので。インクの乗り具合で刷り上がりが全く違ってきます。完成版が刷り上る頃は、見せて見せてと工房が湧き上がりました。

作る楽しみを味わえるのも実技研修ならではの、版画は特に完成というゴール地点がわかりやすいため刷り上がりの喜びもひとしおでした。銅版画はプレス機が学校にないと実施は厳しいですが、銅版以外の版画技法でシルクスクリーンと紙パレットを使ったカッティング技法や、アルミ製の紙を使った凹版の技法等を教わり、是非、授業でやってみたいと感じました。

#### 5. おわりに

平成25年度で大沼先生の講座は最後になり凄寥の想いが拭えませんが、身を引き締めて来年も受講を考えています。本研修にあたり準備・運営をしてくださった関係者の皆様、お世話になりありがとうございました。次回も楽しみにしています。